

聖書:ダニエル書12章5～13節

説教:終わりに割り当ての地に立つ

はじめに

4月から見てきましたダニエル書も今日が最後となります。新型コロナウイルスのことで、教会が当たり前のように行ってきた礼拝ができなくなるという事態のなかで、私たちはどう歩むのか。そのことをダニエル書を通して教えていただきたいとの願いから始まったことでした。今日はその最後のところを開いています。彼は高齢となり、間もなく地上の人生を閉じようとしています。そのとき彼に語られたことは、いまの私たちにはどのような意味があるのか。ともに考えていきます。

## 1 ダニエルの生涯

### 1) 逆境の中にあっても信仰を守る

ダニエルの生涯を簡単に振り返ってみます。ダニエルがまだ少年であったとき、ある日エルサレムがバビロンの軍隊に包囲されてしまい、神殿は荒らされ、彼はバビロンに連れて行かれる。そんな逆境の中にあっても、信仰を守ろうとします。時には死を覚悟しなければならないことも何度かありました。誰が見てもすばらしい信仰者にしか見えません。

### 2) 最初の危機：油注がれた方（キリスト）を知る

ところが人生の後半にさしかかると、ダニエルは二度にわたる信仰の危機を経験します。最初の危機は、ダニエル自身が見た幻がきっかけでした。恐ろしい獣が現れて聖徒たちに戦いを挑み、聖徒たちは力尽きて倒れてしまう。そんな幻を見てダニエルは、その意味がわからず、寝込むほど悩んでしまうのです。

それから数年経ったとき、御使いガブリエルが現れて、油注がれた方、すなわちキリストが来て、エルサレムを復興するためにこの方は完全に断たれていく、すなわち主が十字架で罪を贖ってくださることをダニエルは初めて知らされました。聖徒たちが苦しみに会うのはなぜなのか。そのときも直接の答えはありません。けれども、苦しむ者のために神は油注がれた方を送ってくださるのだと聞いて、いったんはそこに希望と慰めを得ることができました。

### 3) 二度目の危機：終わりの時について知る

しかし依然として疑問が残るのです。なぜ荒らす忌まわしい者が現れて聖徒たちは苦しまなければならないのか。なぜこのことにこだわるのでしょうか。ダニエルはずっと考えてきたんです。自分だけがどうしてこのような人生を歩まなければならないのか。でも納得できる答えが与えられないまま彼は八十歳を過ぎ、やがて親しい家族を失います。家族の死を経験し、自分の死が間近に迫るときこの悩みはますます大きくなり、二度目の大きな信仰の危機に立たされます。

もちろん彼は信仰によって、復活のいのちは信じていました。けれどもそれは、神が完全に勝利しても誰も苦しむことがない、そんな明るい将来のことです。ところが、世の終わりの時、荒らす忌まわしい王が聖なる所に立って、世の始まりから今に至るまでなかったような、大きな苦難が襲ってくる。そのとき信仰者は苦しみを通ることになるだろう。そのような話を聞かされ、混乱してしまいます。

## 2 イエス・キリストの姿

### 1) 川の水の上にいる人

今日の箇所を詳しく見ていきましょう。ダニエルがこの幻を見ていたとき、ティグリスという大きな川のほとりにいました。ふと気がつくと、川のこちらがわと向こう岸にそれぞれ一人ずつ御使いが立っています。そしてもう一人、亜麻布の衣を着た人が川の真ん中に立っているのが見えます。御使いは、この亜麻布の衣を着た人にこう問いかけています。6節。「この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」するとその方は、両手を天に上げて7節でこう答えます。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」

亜麻布の衣を着た人は、御使いでさえ知らない情報を知っています。川の上に立つこともできる。子なる神キリストである可能性があります。

### 2) 亜麻布の衣

そのように考えるもう一つの理由があります。10章5、6節にこの方の姿についてこう書かれています。「見ると、そこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのもようであった。ま

た、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のようであった。」

ダニエルと一緒にいた人たちはその姿は見えませんでした。恐ろしくて身を隠してしまいました。ダニエル自身も体から力が抜けて、意識を失ってしまいます。ダニエルでさえ自分の罪の汚れによって倒れてしまうほど、この方の聖さが際立っています。

もう一つ気がつくことがあります。10章と6節と7節で、「亜麻布の衣を着た人」というフレーズが三度も繰り返されていることです。亜麻布は当時の高級な織物で、庶民が着るようなものではなかったそうです。もしこの方がキリストであるならば、ではいったいつ亜麻布を着たのでしょうか。マタイの福音書27章にその答えがありました。弟子の一人であったアリマタヤのヨセフがイエスのなきがらを十字架から降ろして墓に納めたとき、亜麻布で包んだと書いてあります。これらのことから、川の上に立っておられるのは、よみがえられたイエスではないかと考えられます。

### 3 時の終わり

#### 1) 一時と二時と半時

続きを見ていきましょう。御使いの問いかけに対して亜麻布の衣を着た方はこう答えられます。「それは一時と二時と半時である。」このことについてですが、11節以降で千二百九十日という数字があって、計算するとちょうど三年半に相当しますので、実際の三年半であろうと考えてよいでしょう。そしてこう語る。7節。「聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき。」これをそばで聞いていたダニエルはますます納得しません。彼がずっと心の中にしまっていた大きな疑問について尋ねます。8節。「わが主よ、この終わりはどうなるのでしょうか。」

#### 2) 悪しき者と賢明な者

これに対する答えはこうでした。10節。「多くの者は身を清めて白くし、そうして錬られる。悪しき者どもは悪を行い、悪しき者どものだれも理解することがない。しかし、賢明な者たちは理解する。」

二つのことが書かれています。まず「悪しき者どもは悪を行う。」終わりの時が来たとしても悪しき者どもは、この世はいつまでも続くかのように考え、さばきなどないのだと思って、悔い改めることもせず、苦難はますますひどくなります。

このことはマタイの福音書24章21、22節でイエスも述べています。「そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」

ダニエル書に戻り、10節の前半で「多くの者は身をきよめて白くし、そうして錬られる」とあるのはこのことです。自分の努力で身を清めて白くなるのではなく、自分の力で錬られたクリスチャンになるのでもない。否が応でも外からやって来る試練によって、忍耐しなければならぬ日がやって来ます。それも厳しい試練だということです。

これを聞いてどう思われるでしょうか。誰もが幸せな人生を歩みたいと願い、苦勞などしたくないと考えます。幸せになりたいと思ってクリスチャンになったはずなのに、これではなんのために信仰者になったのかわからなくなります。

確かに「賢明な者たちは理解する」と書かれています。試練の中で忍耐し続けることができたならその人こそ「賢明な者」と呼ばれるのかもしれませんが、でもいったいそんな忍耐にどんな意味があるのでしょうか。ただ「じっと我慢して耐え忍びなさい」と言われているだけなら、そんな忍耐は御免被りたいと言いたくなります。ダニエルはこれまで十分忍耐してきたのです。なぜ自分はこんな人生を歩まなければならなかったのか。彼が抱えていた最大の疑問です。ここでまた「忍耐しなさい」と言われても納得できたとは思えません。

#### 3) 割り当て地に立つ

では、亜麻布の衣を着た方はそんなダニエルに最後に何を語ったのか。13節。「あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」

なぜ悪しき者どもが悪を行い続け、聖徒たちは、荒らす忌まわしいものの手によって苦しみにあわなければならないのか。そして、なぜダニエルがこのような人生を歩まなければならなかったのか。その答えはありません。

ダニエルが抱えていた疑問は、私たちも同じです。なぜ私はこんな苦しみにあわなければならないのか。なぜ私だけがこのような試練にあうのか。納得できる答えはありません。神はそのことについては語りません。その代わり語ってくださったことは、「あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」この約束でした。割り当て地とは天の御国のことです。

#### 4) 今の苦しみと将来の約束

この一言で納得できるでしょうか。とても納得できないかもしれません。でも、このことばをだれがこれを語ったのか、考えてみたらどうでしょう。亜麻布の衣を着た方です。十字架で苦しみを味わった方です。なぜ十字架の苦しみを受けなければならないのか。神の側にすれば、まったく理由が思い当たらない。イエスの立場に立てば、納得できる答えはないのです。ただ神の一方的なご計画によってそのようにして下さったとしか言いようがない。

なぜ私だけが苦しまなければならないのか。そう問いたくなったら、イエスの十字架を見るべきでしょう。あなたの割り当ての地に立つ。そのように語ってくださる方はどのような姿であったか。死んで十字架から降ろされたときに着せられた亜麻布を着ておられた。

ここにすべての答えが示されていることを覚えて御名をがめます。